



Title	<書評>ヴァレーラ、ドラウジオ（伊藤秋仁訳）『女囚たち：ブラジル女性刑務所の真実』水声社、2023年、302p.
Author(s)	渡会、環
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 79-83
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98447">https://hdl.handle.net/11094/98447</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

ヴァレーラ、ドラウジオ（伊藤秋仁訳）  
『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』  
水声社、2023年、302p.

渡会 環

#### 本書の概要

本書は、2017年に出版されたドラウジオ・ヴァレーラの*Prisioneiras*の全訳である。著者のヴァレーラはサンパウロ市出身の医師で、1989年よりボランティアの医師としてサンパウロ州内の拘置所・刑務所で診療にあたってきた。彼はその経験を3つの本にまとめ、Companhia das Letrasから出版している。いわば3部作の1作目となるのが*Estação Carandiru*（1997年出版）で、一般的にはカランドルとして知られる「サンパウロ拘置所（Casa de Detenção de São Paulo）」でのボランティア経験を記した。2作目は、同じカランドルを舞台としながらもそこで働く刑務官方に注目した、*Carcereiros*（2012年出版）、『看守たち』である。最後の3作目*Prisioneiras*は、2006年よりボランティアを始めた「サンパウロ女子刑務所（Penitenciária Feminina da Capital）」での経験をまとめている。2作を経たこともあるってか、3作目では女性刑務官の労働環境の問題についても言及している。1作目と3作目が京都外国语大学伊藤秋仁教授によって日本語に訳され、水声社より1作目が2021年に『カランドル駅—ブラジル最大の刑務所における囚人たちの生態—』、3作目が2023年に『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』として出版されている。

『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』の構成だが、基本的には女子受刑者の生活世界を理解するためのキーワードをタイトルにそれぞれのセクションがもうけられており、各セクションには診察の場でヴァレーラが聞いた女子受刑者たちのライフストーリーが収められている。彼女たちのライフストーリーは様々であるが、いずれも、社会階層、ジェンダー、セクシャリティ等によって差別を生じさせる現代ブラジル社会構造の影響が強くみられ、この構造が鮮やかに描き出されていることに本書の最大の特徴がある。

## 二重の「監視」下におかれる女囚たち

刑務所では一般的に、囚人たちは当局の監視下におかれる。だが、本書で扱われるサンパウロ州の女子また男子刑務所では、犯罪組織の州都第一部隊（Primeiro Comando Capital: PCC）が、眞の「監視」を行っている。当局の「監視」は、点呼や視認、房の解錠や施錠、などに限られる。18世紀から19世紀への転換期における監獄をはじめとする軍隊、病院、学校などに広がる「監視」の特徴を精査したフーコー（1977）は、「処罰」とは規則違反を罰するよりも義務の反復を強制させることであり、つまり、規律・訓練が権力の技術となっている点を指摘した。『女囚たち—ブラジル女性刑務所の眞実—』で女子受刑者に権力を振るうのは、以下に述べるように、PCCであり、その規律・訓練を彼女たちは受けている。

PCCはそもそも1992年にカランドルでおきた囚人111名の虐殺をきっかけに、拘置所や刑務所での抑圧の撲滅を目的の一つとして設立された。しかしながら、PCCは拘置所や刑務所内部での規律を徹底化していくこととなる。独自の裁判制度たるものも確立し、武器や私刑の禁止などの禁止事項も定めている。この禁止事項があること自体が、受刑者の間でのトラブルの発生を抑止している。ヴァレーラがカランドルでボランティアを始めた頃には私刑が頻繁で、ナイフの保持などがみられたが、女子刑務所で始めたとき、男子刑務所も含めて、それらの問題がみられなくなっていた。それほど「監視」が徹底している。

なお、サンパウロの女子刑務所では、PCCのメンバーである「姉妹たち」が男性幹部からの「お達し」を伝える。彼女たちは女子刑務所では「リーダー」であっても、男性幹部に対しては、彼らの指示にただ従う立場である。なお、同性愛者は「姉妹」になることができない。「姉妹たち」は、組織への従順な「女性」としてその身体を作り上げられているのである。

PCCが有する権力の技術が「姉妹たち」の組織への従順な身体を作り出すのは、出産援助金や、日々の生活もままならない「姉妹たち」の家族への生活必需品一式の提供など、ブラジル政府並み・あるいはそれ以上の形で行われる「社会福祉」も通じてなされる。

この「姉妹たち」により、犯罪組織に入っていない女子受刑者たちもまた、子どもを虐待した者には冷淡な扱いや侮辱がなされるよう、男性幹部が定めるジェンダー規範の影響を受ける。

## 女子受刑者の生活世界

女子受刑者にとって、犯罪組織の存在は刑務所外でも「身近」であった。彼女らの多くが、貧困から犯罪組織との関わりをもち、薬物取引などの罪で刑務所に入ることになった。相互主観的な世界である「生活世界」（シュツツ・ルックマン 2015）という概念が注視するのは個人の経験や知識の社会化という側面であるが、彼女たちの経験や知識の社会化に犯罪組織での規律・訓練が関係しているのである。

この女子受刑者の生活世界は、犯罪組織との関わりがない市民にとって「別世界」のものであるというわけではない。刑務所は「社会を映す鏡」（矢野 2014: 23）であり、女子受刑者の犯罪に社会が課すジェンダーの問題がどのように関わっているか、日本でもアジア女性資料センターが『女たちの 21 世紀』80 号で「女子刑務所－これから処遇・医療・福祉を考える－」という特集を組んで考察している。ブラジルと同様、日本でも女子受刑者の罪名として増えているのが薬物取引であるが、犯罪に関わる男性との交友関係を通して行われたものが多い（松本 2014）。

好ましくない交友関係に女性たちが放り込まれるのは、本書でも明らかにされているように、幼少期のネグレクトや性的な暴力、夫からの家庭内暴力といったジェンダーの不平等に起因する「暴力」を受け、家庭環境に恵まれなかつたことが大きい。矢野（2014）は、国を問わず、女子受刑者には彼女たちの被害者性も高いと指摘しており、ジェンダーの視点を取り入れて、受刑者を取り巻く社会の差別構造を明らかにしようとする。同じことをヴァレーラも本書で行っていると指摘できる。

ジェンダーの不平等は別の形でも表れる。家族やパートナーは男子受刑者への個別訪問を欠かさないのに対し、女性の場合だと収監を機に関係を絶つてしまったりすることも少なくないという。そうした愛情不足だけが理由ではなく、同性だけがいるという女子刑務所の空間の特異性、さらにはジェンダーに起因する社会でのセクシヤリティの抑圧等が絡み合い、女子刑務所では同性愛が多くみられ、同じ受刑者であるパートナーからの愛情を受けて生活している。

## 訳者による解説「文化人類学としての書」

訳者の伊藤秋仁氏は本書を「文化人類学としての書」と評してい

る。医師としていわば社会のエリートであるヴァレーラが周縁層出身の女性たちに寄り添い、犯した罪や人生、そして心情までも、彼女たちに語らせることができた、その語りを引き出す能力を評価しているからである。

その能力についてここでさらなる考察を試みたい。本書の最後でヴァレーラ自身が述べているが、彼は「医師」の仕事をセラピーと認識していた。この認識をもって診察にあたってきたことも、彼女たちから語りを引き出すことができたといえる。女子受刑者は彼を「医師」として接してはいたが、一人の女子受刑者が「あたしの人生の話をきいてくれた」と言っていたことも示しているように、実際には「セラピスト」的な存在に近かったのではないだろうか。そもそも、医療機器がほとんどない刑務所内での医療行為には限界がある。受刑者は「医師」としての彼に敬意を払い、「セラピスト」としての彼に心を開いた。そうでなければ、本書で鮮やかに記録された語りは彼女たちから一生つむぎだされることはなかっただろう。

「能力」以外にも、ヴァレーラ自身の「努力」も本書からはうかがえた。2作目で扱った看守たちとは定期的に飲み交わすなどして、「医師」であるがゆえに看守たちが保っていた彼からの心理的な「距離」を縮めたことも、本書では述べられている。

さらにもう一つ、「文化人類学としての書」としての評価を加えるならば、ヴァレーラが本書を通じて自身のポジショナリティを明確に示している点である。人類学者はフィールドで透明な存在ではないし、「書く」という特権的な立場にある。（クリフォード・マーカス 1996）。本書はボランティア初日に医師として女子刑務所に入っていく場面から始まり、医師として彼を刑務官が出迎える様子が書かれている。医師である彼に誠意をもって接する女子受刑者の様子も描かれ、ときに「男性」として受けた視線についても書かれている。さらに、本書は、ヴァレーラが彼のライフストーリーを読者と共有する形で締めくくられている。

### おわりに

本書の最後に収められた彼自身のライフストーリーで語られているのは、幼い頃に犯罪者を題材としたラジオドラマを叔父と聞いていたこと、生まれ育ったサンパウロ市にある暗黒街を訪れてみたこと、彼の成長に合わせる形で都市もまた一層成長を遂げるなか犯罪

そのものの質がかわってきたこと、である。都市の「暴力」の中で女性が最大の被害者であること、ヴァレーラは訴えている。

都市の「暴力」には健康な生活を営む権利が十分に保障されていないことも含まれるが、そうしたものは誰も受けはならない「暴力」だと、今日のヴァレーラは考え、行動しているようである。

「健康について全ての人々に向けた情報提供 (Informação Sobre Saúde para Todos)」と副題をつけたポータルサイト *Portal Drauzio Varella* を現在、運営している。記事や映像を通じて、健康維持のための具体的なアドバイスや、症状から考えられる疾患についての説明など、健康な生活を営むための多様な情報を無料で発信している。

最後に、日本での出版に伴い、つけられた帯について批判したい。そもそも本書が学術的な書ではないこともあるが、帯には「ようこそ気狂い女どもの館へ」という表現が使われている。「気狂い女どもの館」自体は、ヴァレーラが女子刑務所でボランティアを始めた日に男性職員に言わされた一言ではある。だが、ここまで述べてきたように、「気狂い」としてブラジル社会の「特殊な存在」として捉えてしまったら、ジェンダー、セクシャリティ、人種、社会階層などが複雑に絡み合い女性たちを社会において不当な立場に置いてしまう現代ブラジル社会の構造を、この本を手にするだろうブラジルについて学び始めた学生やその他の読者が理解することは不可能となる。

### 引用文献

- フーコー、ミシェル(1977)『監獄の誕生－監視と処罰－』田村倣訳、新潮社。  
シュツツ、アルフレッド、トマス・ルックマン(2015)『生活世界の構造』那須壽訳、ちくま学芸文庫。  
クリフォード、ジェイムズ、ジョージ・マーカス編(1996)『文化を書く』春日直樹ほか訳、紀伊国屋書店。  
矢野恵美(2014)「海外における女性受刑者の処遇の状況－スウェーデン・英国の例－」(『女たちの21世紀』no.80 12月号) 22-26ページ。  
松本卓也「『女子刑務所』の診察室からみえること」(『女たちの21世紀』no.80 12月号) 28-33ページ。